

---

# 補陀落渡海を思う

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

補陀落渡海を思う

### 【Nコード】

N4110P

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

太平洋の向こうに見えるのは浄土なのか。

午前6時、太平洋を臨むと太陽が水平線から昇ってゆく。その様は荘厳でまた信仰と似た祈りをささげたくなくなるから不思議である。

始発の飛行機に乗るといふ夫を送って行くために家を出て、花街道に向かう。

花街道は太平洋に面しており、坂本龍馬が眺めたという桂浜にながっている。

朝焼けの美しい太平洋は風の状態で、静かに波を揺らすのはシラス採りの小さな漁船だけである。

「わあ、太陽がああの山の間」

「おい、あそこは太平洋だよ」

「えーっ、どう見ても陸に見えるわねえ」

「だから、補陀ふたらく落信仰と言つのがあつたというのも分かるなあ」

初めて聞くその言葉に、送り届けた後パソコンで調べてみた。

その昔、足摺岬や和歌山の熊野などから捨身行の一つで、行者が船に乗りそのまま伴走船の綱を断ち切ると、そこには漕ぐ道具など何も無い小さな小舟に置き去りにされるといふのだ。

二度と戻ってはこないように百八個の石を体に巻き付けたという僧もいたそうだ。なんとという荒行と言つか捨身の行であろう。

写真で渡海船を眺めれば、小さな鳥居のような門が四方にある。

それぞれ「発心門」「修行門」「菩薩門」「涅槃門」というらしい。その中に箱があるのだ。乗組員など誰もいなくて、その箱に行者が入ったとされている。伴走船が綱を断ち切った後は、海流の力で南方にあるとされた浄土へと向かうのは信仰の力がなければありえないことだ。

その精神力は今更ながら凄まじいものであつたと思う。

中にはあまりの苦しさから海から戻ってしまう僧もいたようではあるが、それは非常な恥さらしということと石つぶてを放り投げら

れたり、殺されることもあったそうである。

朝焼けの中の雲海は陸地のようで、どう見ても山々が連なったように、補陀落渡海を試みようという僧が出てきても不思議ではない。昼間は太平洋なのだから陸地など見えるはずもないのに、朝焼けの中に見える幻の山々は、あそこが浄土なのだと思っても無理はない。昼間は見え、しかも冷えた冬の朝だけに見える幻の浄土。祈りを捧げる僧が箱に入った時から即身仏となることを確信する、この捨身行。

達磨のようにほら穴の中に入ったり、このように船の箱の中に入れて流されるだけという、考えることもできないような行。

これらを行った行者の祈りというのは凄まじいものである。全ての自分自身の本能を生きながら蓋をするようなものである。煩惱の中でしか生きられない私は、それらを断ち切ることなどできはしない。

平安から江戸まで補陀落渡海を行った回数は二十回だという。これだけあふれる人口の中でも、それができる人間が僅か二十人。実に興味深い。そうなのだ。生きながら即身仏となるような人は、やはり神や仏の数しかないということか。

これと言った宗教を持たない私だが、神前で結婚した。きっと死んだ時は僧を呼ぶに違いない。

朝焼けの中を漕ぎだした伴走船と渡海船。

それぞれがどのような思いで乗りこんだであろうか。

ふと、数世紀も前の出来事が眼前に広がっていく。綱を切る音を箱の中で行者はどう聞いたであろうか。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4110p/>

---

補陀落渡海を思う

2010年12月10日19時13分発行